



小川芋銭 おがわ ゆぜん 1868年(慶応4) 3月11日〜1938年(昭和13) 12月17日(満70歳)

半農半画の日本画家 自称農画工 鉄斎と並ぶ能書 本名は小川茂吉 幼名は不動太郎
 1868年(慶応4年・明治元年) 江戸の赤坂の牛久藩邸で、父同藩大目付小川伝右衛門賢勝と母栄の長男として生まれる。武家の出身だが、1871年(明治4) 3歳の秋、廃藩置県により、一家は今の茨城県牛久市城中町に移住し、農業を営んだ。妹のしま生まれる。



国沢新九郎

1874年(明治7) 6歳、11月、国沢新九郎、上京し麹町に洋画塾「彰技堂」を開く。

1876年(明治9) 8歳、国沢新九郎の協力で工部美術学校設立さる。(日本初官立美術学校)

1878年(明治11) 10歳、弟安三生まれる。フォンタネージ辞職。「十一会」結成。

1879年(明治12) 11歳、下等小学校第三級を卒業し上京、親類の小間物屋に奉公する。「龍池会」発足。

1880年(明治13) 12歳、叔母の婚家先に寄寓し、桜田小学校に通学。秋、小学校尋常科第三級後期を卒業

1881年(明治14) 13歳、本多錦吉郎(国沢新九郎の弟子、彰技堂を引き継いだ。日本で最初にペンで漫画を描いた人)に入門し洋画を学ぶ。芋銭はここで洋画の基本的技術と漫画を学んだ。



芋銭 13歳

岡倉天心、フェノロサと日本美術を調査。自由党結成。自由民権運動盛ん。

1882年(明治15) 14歳、「書は美術ならず」論争。(小山正太郎25歳、岡倉天心19歳) 立憲改進黨結成。

1883年(明治16) 15歳、工部美術学校廃校。明治17年、「鑑画会」発足。

1885年(明治18) 17歳、彰技堂の画学の全課程を修了。小間物店に戻り、仕事をしつつ絵に熱中、小間物店

を去り、周囲の反対のなかで、転々としながら絵の独習を続ける。日本画科の

荒木寛友を訪ねる。町絵師抱朴斎から漢画を学ぶ。両親は画家になる事に反対。



本多錦吉郎

1887年(明治20) 19歳、東京美術学校設立される。

1888年(明治21) 20歳、遠い縁者の尾崎行雄の推挙で客員の画工として「朝野新聞」に入社？

7月15日、会津磐梯山の大噴火(近代日本初の大災害であった)

朝野新聞は特派員として浅井忠らを派遣した、

それに芋銭も助手として同行した。(この旅で

芋銭が学んだことは、特に、自然に対する

人間の無力さ。浅井忠の人と仕事について。)



浅井忠

1889年(明治22) 21歳、2月、大日本帝国憲法発布。

7月、東海道本線新橋〜神戸間全通。

10月、富山県魚津米騒動。東京美術学校開校。明治美術会結成。

1890年(明治23) 22歳、4月、はじめて挿絵が「朝野新聞」に掲載される。

5月、「府県制・郡制」公布。(昼は職場。夜は習画。休日は展覧会回り)

7月1日、第一回衆議院議員総選挙で、中江兆民・植木枝盛当選。

10月、教育勅語発布。父の隠居にともない家督を相続する。

岡倉天心が東京美術学校の校長になる。

11月、第一回帝国議会招集。(議会スケッチを描く)

1891年(明治24) 23歳、1月、内村鑑三、教育勅語に拝礼拒否。

10月28日、濃尾地震発生。

(マグニチュード8。最大震度7、死者7273人)

1893年(明治26) 25歳、父の命により、牛久へ帰り、農業に従事する。

1894年(明治27) 26歳、7月25日、日清戦争勃発。

1895年(明治28) 27歳、2月、農民のきい(18歳)と結婚。

11月30日、日清戦争終結。



「磐梯山噴火真図」山本芳翠画

「東京朝日新聞」掲載の版画

477人の死者行方不明者を出した。

「地上の人類というものは、安心ならぬ土床の上に安心らしい尻をおろし、それですましているものだと思う」と記す。



濃尾地震 歌川国利「岐阜市街大地震之図」

日本史上最大の内陸地殻内地震。



「草汁漫画」より、春眠・春耕
上図画賛：春暁、謡曲「俊成忠度」
いはらぎ新聞に明治40年に掲載。
下図、画賛：たんぽゝや一目に見ゆる花と茎（乙二句）いはらぎ新聞に明治38年に掲載。



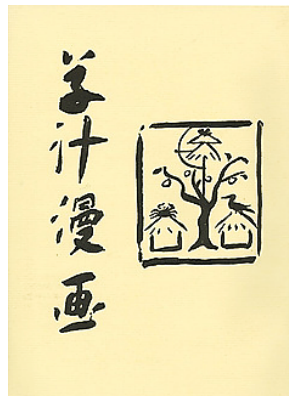
「草汁漫画」より、洪柿の花
画賛・しぶかきの花ちる里と
なりにつけり（蕪村句）



「草汁漫画」より
浮島春色
花大根の絵



「草汁漫画」より、獺の祭
画賛：獺の祭見て来よ
瀬田の橋 はせを



芋銭のはじめての著書『草汁漫画』表紙
「草汁」とは絵具のこと。蕪村の「手すさびの団扇画かん草の汁」の一句からきているらしい。



芋銭筆「水害地より来る乞食」
『平民新聞』57号



日刊平民新聞第1号、芋銭の挿絵
明治40年（1907）1月15日

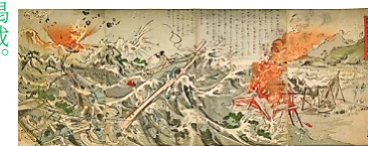


荒畑寒村



堺利彦

- 1896年（明治29）28歳、3月、長女はな生まれる。「茨城日報」に漫画を投稿しはじめる。
この頃芋銭の号を使いはじめたか？6月15日、明治三陸地震発生（マグニチュード8・5。死者行方不明者約22000人）
8・5。死者行方不明者約22000人
1897年（明治30）29歳、牛里の号で俳句をつくりはじめる。『ホトトギス』創刊さる。
1898年（明治31）30歳、岡倉天心、東京美術学校を辞職、7月、日本美術院創設される。
1899年（明治32）31歳、茨城県取手市の俳句結社水月会に参加。
1900年（明治33）32歳、『ホトトギス』の募集俳句に応募、はじめて入選する。
『ホトトギス』の募集裏絵絵画に応募、4等となり掲載される。
1901年（明治34）33歳、『ホトトギス』の募集図案に応募、等外として掲載される。
1902年（明治35）34歳、3月、長男修一生まれる。子規庵をはじめて訪れる。
9月19日、正岡子規没（満34歳）11月、雑誌『文芸界』に挿絵を掲載。
1903年（明治36）35歳、『読売新聞』に大正12年まで多くの挿絵を掲載。幸徳秋水を知る。
水戸の新聞『いはらぎ』に挿絵や俳句などを掲載（没年まで）小杉未醒を知る。
1904年（明治37）36歳、1月、水戸で友人らと文芸団体「木星会」を結成。2月8日、日露戦争勃発。
幸徳秋水、堺利彦の発行する『週刊平民新聞』に挿絵を掲載。翌年の廃刊まで多くの挿絵、俳句などを掲載。7月2日、父死去（享年65歳）
1905年（明治38）37歳、1月、『吾輩は猫である』が『ホトトギス』に発表さる。本格的な日本画をめざす。
3月15日、次男洗二生まれる。
4月、荒畑寒村（18歳）が訪れる。
9月、日露戦争終結。
4月15日、母死去。『草枕』発表。
1906年（明治39）38歳、4月15日、母死去。『草枕』発表。
1907年（明治40）39歳、日刊『平民新聞』創刊。『方寸』創刊。
夢二、長塚節や独歩を知る。文展開始。
1908年（明治41）40歳、4月、病を得て、牛久に帰郷する。
6月、『草汁漫画』刊行。赤旗事件。



歌川邦政筆「明治三陸地震」

1909年（明治42）41歳、1月13日、三男知可良生まれる。
1910年（明治43）42歳、4月、『ホトトギス』に没年まで挿絵掲載。
5月、大逆事件はじまる。



幸徳秋水

幸徳秋水ら検挙される。

石川啄木『時代閉塞の現状』執筆。
芋銭にも刑事の尾行、主義者ではなく弾圧なし。8月、会津へ旅。

8月29日、日韓併合。堺、売文社開業。

1911年（明治44）43歳、1月、幸徳秋水処刑さる（満39歳）

9月、芭蕉ゆかりの地を旅する。

東山新滝旅館で初めて横山大観に会う。

10月10日、清国で辛亥革命勃発。



横山大観

1912年（明治45・大正元年）44歳、1月1日、中華民国成立。『近代思想』発刊。

堺利彦の『売文集』に「巻頭の飾」を寄せる。啄木没。

1914年（大正3）46歳、7月28日、第一次世界大戦勃発。天心没（大正2年）

10月、次女桑子生まれる。

1915年（大正4）47歳、2月、長塚節没。3月、平福百穂らと珊瑚会を結成。

4月、上野・松坂屋にて第一回珊瑚会展開催。芭蕉の旅。

8月、山村暮鳥、牛久の芋銭宅を訪問、交友がはじまる。

1916年（大正5）48歳、12月9日、夏目漱石没（満49歳）

第三回珊瑚会展に出品した「肉案」が横山大観や小杉放庵に認められ日本美術院同人に推挙される。本格的な日本画家になりたいという芋銭の夢が叶ったのである。

6月、日本美術院同人となる。芋銭は、家事や農事は妻に任せ、長い旅ににかけて、絵画に専念するようになる。後援者田代蘇陽の招きで会津に3ヶ月間滞在。



山村暮鳥



芋銭筆「肉案」1917（大正6）49歳 紙本墨画
茨城県近代美術館蔵

「ばんざんせいにく」という禅の話を描いたもの。
芋銭は博学で中国古典に通じていた。
横山大観は芋銭の文学的才能を買ったのか？まだ漫画臭の残る作品である。

1918年（大正7）50歳、11月、第一次世界大戦終結。3月、相馬御風の『大愚良寛』出版される。

8月、富山県砺波市宝念寺に54日間滞在

1月、長女はな、弓削玄三郎と結婚。

1920年（大正9）52歳、1月、国際連盟発足

7月、『三愚集』（一茶の句、漱石の書、芋銭の画）刊行。8月、東北、北海道の旅へ。

11月、牛久の自宅に画室「天魚楼」完成。

11月、長野県から新潟県へ旅。

4月、米国での日本美術院展に出品。

1921年（大正10）53歳、5月、本多錦吉郎没。8月、出雲崎の良寛旧跡を訪ねる。



奥の2階に10畳の画室「天魚楼」完成。
家全体を「草汁菴」と名付けた。
家は芋銭の父が建てたもの。



芋銭筆『ホトトギス』
第15巻第8号表紙
明治45年5月「河童と蛙」



国木田独歩
1908年36歳で死去



長塚節
1915年（大正4）
35歳で没。



小杉未醒（放庵）



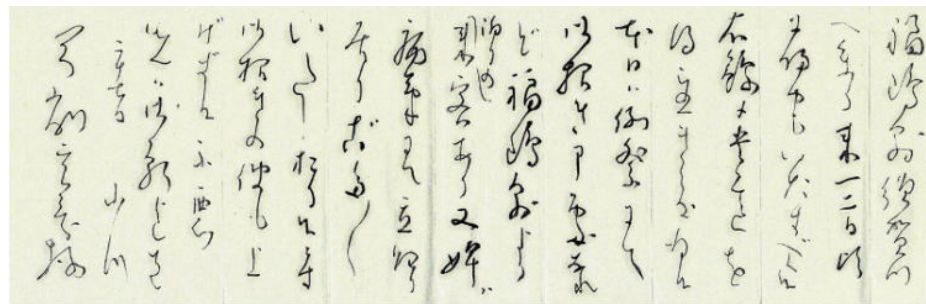
芋銭邸から見える牛久沼



芋銭筆「水草絵巻」部分 1918年（大正7）50歳 紙本墨画 29、3×809cm 茨城県近代美術館蔵
この絵巻と、「樹下石人談」は、芋銭独自の画のはじまりとして、「大きな節目となっている」（尾崎正明氏）。芋銭はしだいに中央画壇で注目されるようになり、日本画家小川芋銭が誕生した。



「三愚集」部分 1920年（大正9）52歳 瘦蛙 一茶句「瘦蛙まけるな一茶是にあり」漱石書



芋銭筆「1922年（大正11）6月頃の弓削玄三郎宛書簡の後半部分」福島県須賀川へ参り来一二日頃に帰宅いたすべく候右ゆめ貴意を得置き度存じ候 本日は例祭にて御招き申所なれど福島県より泊りの来客あり又婢は病氣にて立帰り居りごたごたいしおり候に付御招きの便も上げずに悪しからず先は御願迄 草々 二十七日 小川 弓削玄三郎様



芋銭筆「樹下石人談」1919年（大正8）51歳 紙本墨画 60、7×89cm
第6回日本美術院展に出品。牛久の得月院の榎と椎の大木を描いたもの。

芋銭は、西山泊雲宛大正8年9月15日付書簡で「・・・自分には昨年よりは稍宜敷つもりなるも世間は余り見てくれず、場裏にてはかの木の端に譬へられたる法師の如くあるかなきかの石人語御一笑可被下候」、と嘆いている。

森口多里は「二科及美術院の洋画」『早稲田文学』大正8年10月、で「・・・かゝる行方は技巧のある人が自然に抜いて行って此所まで到着する時に本当に面白いものである、例へば大雅の如きうんと叩き込んだ手腕を持ってゐるからあゝ云ふ抜けた行方をする所に無限の味は出てくるが元より技巧の修養のない芋銭氏があゝ云ふものをかいたとて大雅の如き面白味は出て来ない。けれど技巧が作家その人の人格から必然と出て来た時に素人が画いても深味と高味とが出てくることは事実である。・・・芋銭氏の尊い所は何時でも素人の画如く純真であり無慾である所に氏の誇りと尊さがある。」と、述べている。

1922年（大正11）54歳、6月、座禪する。体調不良で床に臥すこと多し。
1923年（大正12）55歳、9月1日、関東大震災発生（マグニチュード7・9、死者行方不明者十萬五千人余）大杉栄ら殺害される。
1924年（大正13）56歳、1月〜7月、銚子海鹿島の篠目氏別荘に滞在、そこを「潮光庵」と名づけ、何度もここに滞在した。
12月、暮島没（40歳）。



大杉栄（満38歳没）



芋銭筆「夢中野千燈」1925年（大正14）57歳 紙本墨画 62.9×84.6 cm
舟子は眠っている。対岸には狐火が燃えて湖面に映っている。

「・・・夢に見たる狐火の風景に御座候。・・・」（大正14年8月24日付、斎藤隆三宛書簡）

これは、「百歳に残り笑はれざるもの」（大正14年10月17日付西山泊雲宛書簡）と言うくらいの自信作であった。

この作品は「芋銭の芸術の一つの転機を示している」（尾崎正明氏）それまでの作品には、自然に対する畏怖があったが、ここにはない。あるのは夢幻の幻想世界である。自然の本質に迫ろうとしている。



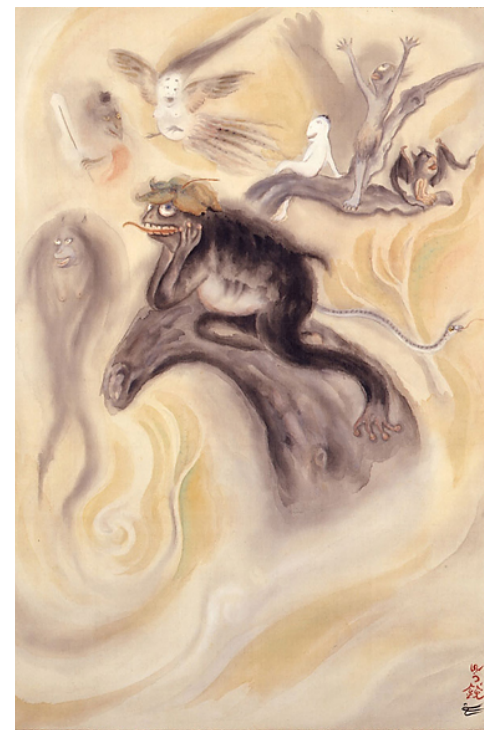
芋銭筆「水魅戯」1923年（大正12）55歳 紙本彩色 62.4×95.2 cm
茨城県近代美術館蔵 日本美術院展に出品。



芋銭筆「夕風」1924年（大正13）56歳 絹本彩色 54.8×83.4 cm
五島美術館蔵 第11回日本美術院展に出品。

「・・・・・・心は時に飛行機乗りが霊空に浮ぶ心持ちの遊戯地にも入り存外呑気の病人にも有之候。只目下の望は顫動全く止み運腕の自由に御座候。通常人のすらすらと一向苦にもならぬ所を迂生にとりては中々の大骨折にてどうやらこうやかきあふせ候も全く一気の先導にまつものに御座候」

（大正13年8月29日付 斎藤隆三宛書簡）



芋銭筆「若葉に蒸さるる木精」1921年（大正10）53歳 絹本彩色 72.5×48.7 cm 愛知県美術館蔵
アメリカで開催の日本美術院展出品作。

「人地球に生まれて二萬年以前既に藝術あり藝術の人たる亦久しき哉 予が性幼より繪を好む長じて藝林の班に入る・・・図中往々怪を描くものあり是予が癖にして實に東洋民族の癖なり縁由する処は老樹浮藻廢瓜水蟲狐獺の類、則自然物体中より其妖氣魅形を捕捉し来る。惟ふに宇宙間虚靈遊動して予が方寸を誘ひくものか・・・」（画集『芋銭子開七画冊』の自序）

水魅山妖には靈的能力があり、人間に禍や幸をもたらすものとして古くから日本人の間に伝承されてきた。それは古代から培われてきた日本人の自然観や宇宙観との関わりの中で生まれてきたものらしい。それらは自然の精霊であり、自然の営みそのものであった。

『夢中野千燈』や『畑のお化け』『狐隊行』などに見られる画風の変化には、以前のように自然と真正面から対峙しながら自然の力の奥の深さを表現していくというより、自然の中に溶け込んで自然と一体化していこうとする芋銭の思想的な深まりがみられる。」（尾崎正明氏）



芋銭筆「積雨 収」1930年（昭和5）62歳 紙本彩色 60.6×108.5 cm 平木浮世絵財団蔵
長雨のやんだ後の水村の光景を描いたもの。水没を免れた人びとが見えるが、それは一つの点景に過ぎず、主題は自然そのものである。

「それまでの田園風景とは趣を異にしている。」（尾崎正明氏）

「・・・秋霖僅かに収まりて沼上は水蒸気満ちたる恍惚依希の景象を捉へんとしたるが作画上の立意に候。兎に角無理なしに作丁したるがいさゝかとりゑに候」（昭和5年10月12日付澤田竹治郎宛書簡）

「情致の線の極所を求め工夫致居候。極所は美にてはなく超越的玄妙なるものに歸し可申存候。美を八釜敷云出したるは西洋舶来にて東洋的には美は極致には無之候」（昭和5年5月8日付、西山泊雲宛書簡）

「・・・芋銭先生はさうした靈氣を玄妙なるものといひ、その玄妙なるものゝ発散する我々の世界の深奥を『極所』といはれた。そしてそれを捕捉しようとするのが自分の絵画の目的だと断言せられた。」（犬田卯・いぬたしげる『芋銭子作品撰集』青梧堂・1942年刊）

芋銭は、自然の中で遅しく生きる村人達を愛し、その生活と自然と、村人たちがつくりだした精霊たちをも描いた。

「芋銭は現実の村人達の生活、・・・自然、・・・想像の世界をも一体のものとして把え、そこに本来あるべき自然観や宇宙観のようなものを見ていた・・・」（尾崎正明氏）

「拙作に捕捉せんとするものは御高示の如く寂光的玄妙観なれども天分薄く容易に到り得ず汗顔に候」（昭和4年12月20日付、池田龍一宛書簡）（『老子』上篇第一章参照）



芋銭筆「新緑潤国土」1924年（大正13）56歳 絹本彩色 145.0×50.3 cm 第10回日本美術院展に出品。



芋銭筆「沼四題・泥鰌打」1922年（大正11）54歳 紙本墨画淡彩 65.4×92.5 cm 第9回日本美術院展に出品。
明かりをつけて、眠っている泥鰌をヤスで突いて漁をする。夏の夜の風物詩。画家の描いた叙景的な風景画。



芋銭筆「沼四題・小鰕網」1922年（大正11）54歳 紙本墨画淡彩 65.3×94.7 cm 第9回日本美術院展に出品。

小鰕漁の様子が描かれている。主題は生活と自然と精霊。しかし、これも画家の描いた叙景的な風景画がかっている。



芋銭筆「狐隊行」1930年（昭和5）62歳 紙本淡彩
45.3×62.5 cm 茨城県近代美術館蔵
松明を持った狐の行列が描かれている。墨と朱の点描表現が美しい。

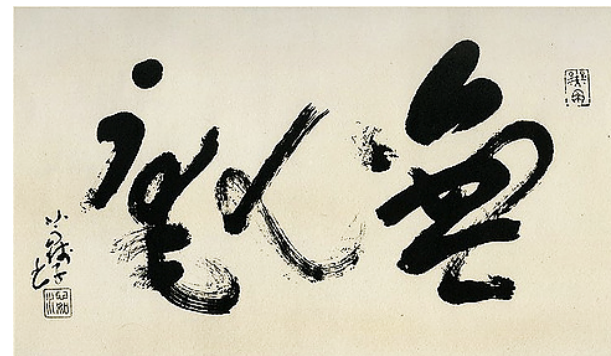


芋銭筆「祭魚」1932年（昭和7）頃 64歳 43.0×52.3 cm
紙本墨画 茨城県近代美術館蔵
カワウソ（獺）が川の神様に魚を奉納しているところが描かれている。愛らしい獺である。獺祭のこと。

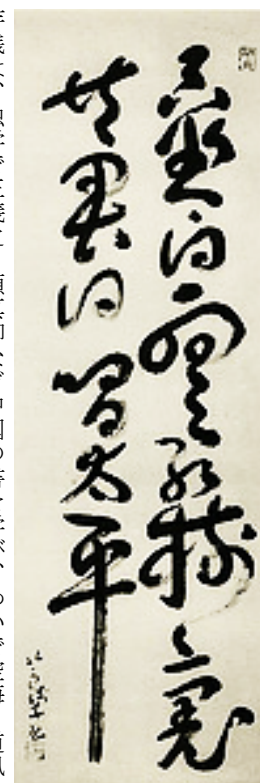


芋銭筆「海島秋来」1932年（昭和7）64歳 紙本淡彩
112×95.6 cm 第19回院展出品 茨城県近代美術館蔵
千葉県銚子市の海鹿島にあった篠目八郎兵衛の別荘「潮光庵」で制作された、海鹿島一帯の風景を描いた作品。
「私は海濤の音を好む。総ての水の音を好きだが特に海の音が好きだ。・・・観音経にある梵音海潮音の一句は如何に神秘にして幽遠なる音律よ。此海波に対して深黙の巨人。巖は亦た敬愛する師友だ。作画の素因は潮の音律から発して海と巖の線に萬古の静寂相を写し、島の貝殻の家に住む人々の哀れさをも収めて寂しい画中の点苔に換へた。」
（芋銭「海島秋来」解題 昭和7年10月）

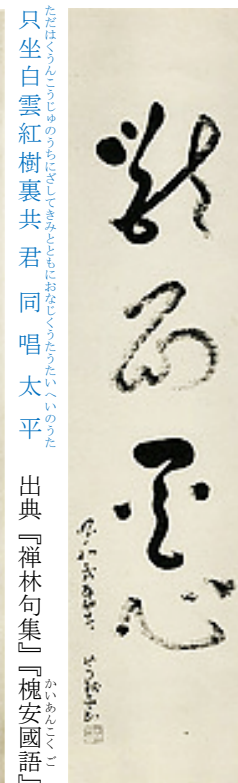
1928年（昭和3）60歳、『芋銭子開七画冊』刊行。8月27日、パリ不戦条約締結。
1931年（昭和6）63歳、9月18日、満州事変おこる。春から秋まで床に臥す生活。福島飯坂温泉で静養す。



芋銭書「無心庵」1927年（昭和2）59歳



芋銭書「唱太平」
1928年（昭和3）60歳



芋銭書「獸面聖心」
1927年 59歳

1925年（大正14）57歳、第12回院展に「夢中千燈」を出品。11月、再度、良寛旧跡を訪ねる。
1926年（大正15・昭和元年）58歳、8月、丹波の西山泊雲宅に翌年の4月まで滞在。「丹陰霧海」を制作した。カンデインスキーに興味を持つ。
1927年（昭和2）59歳、3月7日、北丹後地震（死者2900人余）に遭遇。百病併発。



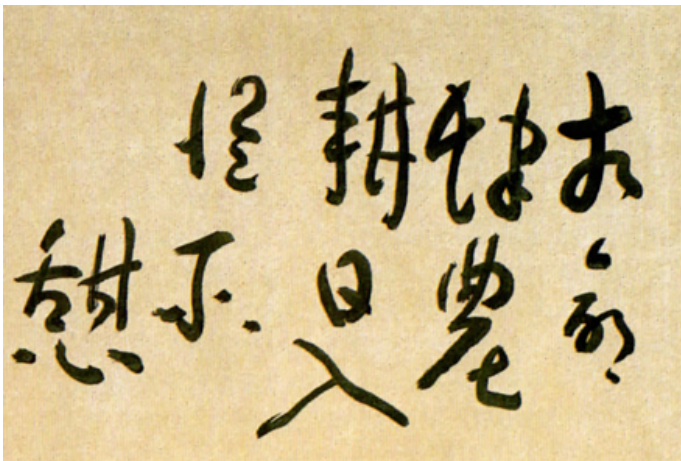
芋銭筆「桃花源」 1936年（昭和11）68歳 紙本彩色 2曲1双屏風
各168.0×177.0cm 陶淵明『桃花源記并詩』の一部が書かれている。



芋銭筆「卯月の芭蕉庵」1935年（昭和10）67歳
紙本彩色 44.5×65.5cm



芋銭筆「畑のお化け」1929年（昭和4）61歳 絹本彩色 42.2×57.5cm
転がり落ちるカボチャを瓜や人參たちが笑って見ている。
「・・・畑のお化けは聊か自信の作、伊太利行に御加はへ願はるれば幸甚に候」（昭和4年3月29日付 斎藤隆三宛書簡）

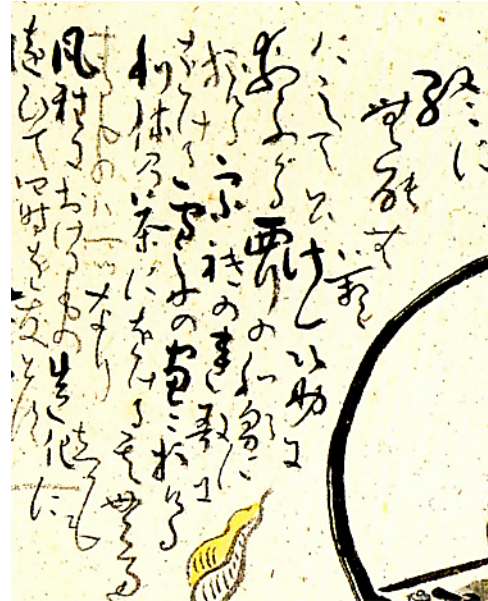


芋銭筆「桃花源」右隻部分

右隻

「相命肆農耕、日入從所憩 桑竹垂餘蔭、菽稷隨時藝」
相い命じて農耕を肆め、日入らば憩う所に従う
桑竹は餘の蔭を垂らし、菽稷時に随って藝う

（左隻）「春蚕収長絲、秋熟靡王稅 荒路曖交通、鷄犬互鳴吠」
「この詩の底に流れる自然と人間の豊かな交歓」（尾崎正明氏）
暖かみと親しみに満ちた作品である。



「卯月の芭蕉庵」部分 芭蕉の「笈の小文」の序が書かれている。
「終に無能無藝にして只此一筋に繋がる西行の和歌における宗祇の連歌にをける雪舟の畫における利休の茶にをける其貫道するものハ一なりしかも風雅におけるもの造化に随ひて四時を友とす・・・」

芋銭は、沼辺の生き物や妖怪、精霊など魑魅魍魎の世界を描きつづけた。なかでも河童を多く描いたので、「河童の芋銭」と称されている。
芋銭は、水辺や山野の妖怪を「水魅山妖」と呼んだ。彼は、生命に対する温かなまなざしと、自然の力への畏敬の念を持ちつづけた。



芋銭筆「河童百図」第46図1937年（昭和12）69歳 紙本墨画 円窓 茨城県近代美術館蔵
54.5×39.3cm
画賛：「因指見月」指に因って月を見る。
出典は『良寛詩』『寒山詩』

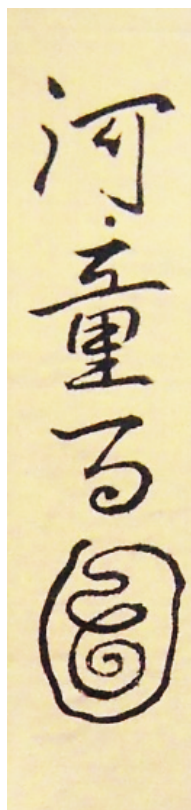
芋銭の言葉
「芸術は自然を離れてはない。芸術は永遠なりの言葉は、自然なるが故である。」
「絵は本職であるから、自信を持てる境涯までに達するには遠いと思うが、字はよく分からぬ為からかもしれぬが、自信を持てる気にもなる。」「無技を以って用とする」

1939年（昭和14）・・・9月1日、第二次世界大戦勃発。

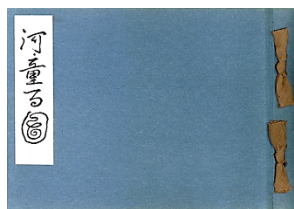
12月17日、死去。

2月、『河童百図』刊行。

1938年（昭和13）70歳、1月31日、入浴中に脳溢血のため倒れる。



芋銭書『河童百図』の題簽
顔真卿の影響が見られる書。



『河童百図』表紙 題字：芋銭



雲魚亭（小川芋銭記念館）牛久市

1937年（昭和12）69歳、7月、支那事変はじまる。9月、雲魚亭新築される。
11月、『小川芋銭翁古稀記念新作画展』開催。
11月、『芋銭子開八画冊』古稀を記念して刊行された。
6月、帝国美術院参与を辞退。
2月、改組帝国美術院第1回展覧会に参与として出品。
5月、師の本多錦吉郎の碑を同門らと、芝泉岳寺畔に建立。

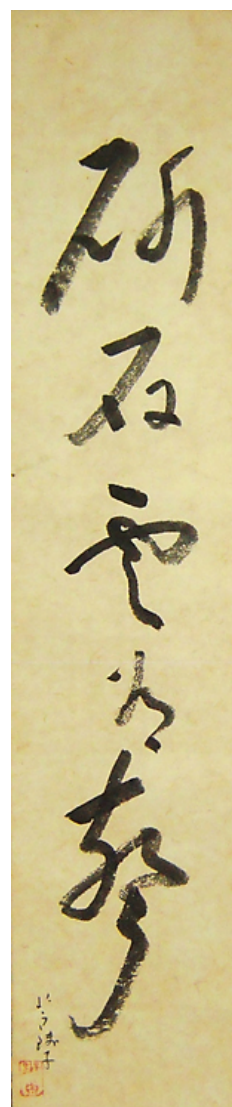


ナチスの党章
ハーケンクロイツ（45度）に傾いた逆刊

1936年（昭和11）68歳、2月、改組帝国美術院第1回展覧会に参与として出品。
1933年（昭和8）65歳、1月30日、ナチ党、政権獲得。
2月、日本、国際連盟脱退。
3月3日、昭和三陸地震発生（マグニチュード8・4。死者行方不明者3000余人）『堺利彦全集』の挿画装幀をする。
8・4。死者行方不明者3000余人『堺利彦全集』の挿画装幀をする。
15年戦争へ突入。芋銭は超有名人。
3月1日、日本、満州国を建国。



こう夫人と（昭和7年）



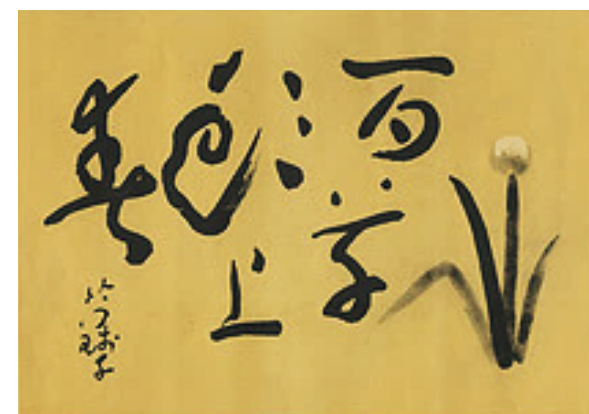
芋銭書 制作年不明
「研石雲有聲」
石を研けば雲に声あり（墨を磨るときの静寂の境地）



芋銭筆「画賛：清夜吟と古文水土宜」1936年（昭和11）68歳、近衛文麿別邸「山儀堂」の杉戸に画かれたもの。

画賛は、^{しょうこうせつ}邵康節の五言絶句「清夜吟」
^{せいやのぎん}清夜吟

月到天心処 風来水面時 一般清意味 （料得少人知）
月天心に到るところ、風水面に来る時、一般の清意の味（はかりえたりひとのしることまれなるを）



芋銭筆「頭上春」1937年（昭和12）69歳
画賛：^{とうじょうのはる}百草頭上春
^{ひやくそうとうじょうのはる}百草頭上春



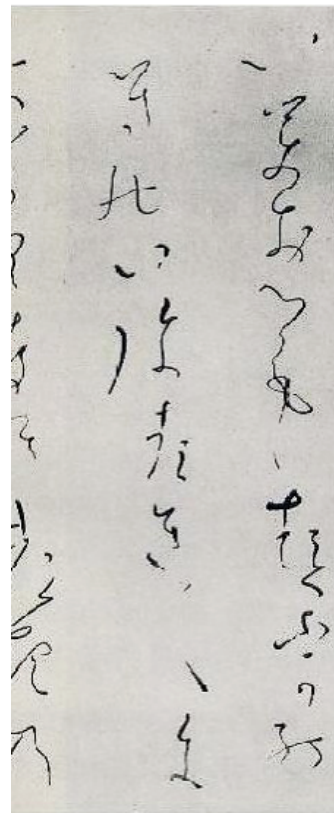
芋銭筆「月乃兎歌意」紙本彩色 44×56 cm 良寛記念館蔵

良寛の長歌「月の兎」を絵に表現したもの。

良寛は、『今昔物語』巻5 第13話などにある「三獣菩薩の道を行じ、兎身を焼ける語」の物語をもとにして、百余句からなる長歌を詠んだ。

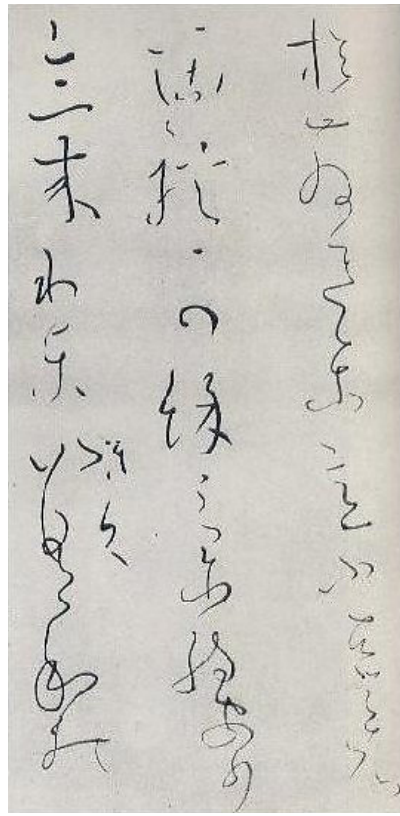
「兎と狐と猿の三匹がまことの信心から菩薩道を修行していた。わが身を忘れて他をあわれむ彼らの行いはまことに立派と見えた。それを見た帝釈天が彼らの本心を試すべく、老人に化して助けを乞うた。三匹は老人を手厚くもてなした。猿は木に登って木の実を集め、里に出ては野菜や穀物を手に入れて持って来た。狐は墓小屋に行つて人の供えた飯や魚を取って来た。しかし何の特技もなく弱い兎は何も手に入れることができない。思いつめた兎は火を焚いてくれと頼み、やがて「私を食べて下さい」と言い残して火中に身を投げたのである。その時、帝釈天はもとの姿に戻り、自己犠牲と利他の菩薩道に殉じた兎の姿をあまねく一切衆生に見せるため、兎を月の中に移してやった。月に兎がいるというのは、この兎の姿なのである。」(『今昔物語』『三獣行菩薩道兎焼身語』・出处は『大唐西域記』?)

いま(の)おつゝも、つが(か)のきの、いやつぎゝに、かたりつぎ、つきの



左とは別の「月の兎帖」部分

おさぎと、いふことは、これがよしにて、ありけりと、きくわれ



良寛書「月の兎帖」部分 1821年、65歳

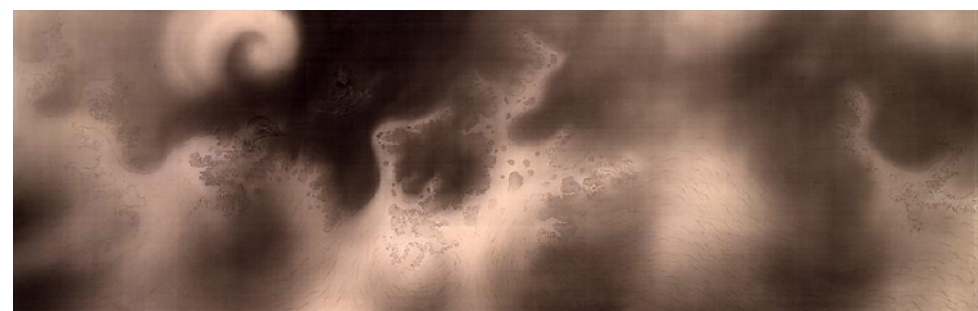
芋銭は、晩年に、よく良寛を写したという。彼は、良寛の堂宇建立のために、何枚かの絵を描いて、資金を提供もし、良寛を聖者として景仰していた。



芋銭筆「大愚」1932年(昭和7)
日本美術院同人作品陳列会出品

賛：はちのこ
はちのこを わがわするれ
とも とるひとはなし と
るひとはなし はちのこあ
はれ (良寛の歌)

「いそのかみふりにし御代
とが友に結びてあふたに
は野山に帰るさかゆつべ
の林にばりさかくつべ
のぬれはひさかたのつ
の帝の聞きましてその
まことを知らむとて翁
なりて申すに心は汝ら
行きて申すに心は汝ら
異にして同じに遊ば
ふまこと聞きしに
ば翁が飢ゑを救へと
を投じてや憩ひに易
とて林よりありて
しより来りたりは前
川より魚をとりて
たり何魚はあはれ
べど何魚はあはれ
のしりて申すは異
計りて来よ狐は
刈りて給ふに
きて給ふに
げればぬ翁の
翁はこれを見よ
もしぬにうさかた
仰ぎてや泣きて
おりてや泣きて
たき申すは
の友だちを
なれどもは
しとて骸を抱
今の世の宮にぞ
の兎にてもいふ
われさへも白たへ
袖はとほりて濡れぬ
(良寛の長歌「月の兎」)



横山大観筆「生々流転」部分 1923年（大正12）56歳 水墨大長巻 絹本墨画 55、3×4070cm

東京国立近代美術館蔵 水の一生を描いたものという。朦朧体で空気や光線が描かれている。

「小川先生はただただ羨むべきである」これは横山大観の言葉である。（大観の弟子の松本英峰の回顧による）大観は芋銭を尊敬し、生涯「小川先生」と崇め、頭が上がらなかったという。大観は、芋銭と同年で同郷（大観は水戸市）であった。彼は東京美術学校の第一期生で、岡倉天心の一番弟子であり、日本美術院の再興者である。日本画壇の重鎮であり第一回文化勲章受章者で帝国芸術院会員。天心と同じ、国粹主義者のようであった。「西の栖鳳、東の大観」と並び称されたほどである。

彼はムッソリーニやヒトラーに絵を献呈したり、日本軍に戦闘機などを献納し、戦後は戦争犯罪人として取調べられている。

「私は富士山をよく描く。今も時折り描いてゐます。恐らく、今後も描くだらうと思ひます。一生のうちに富士山の画を何枚描くことになるか、それは私にもわかりません。といつても、自分から進んでいつも富士山ばかり描くといふではありません。富士山、富士山といつても沢山持ち込んで来られるからです」（近藤啓太郎『大観伝』と、本音を述べている。

「生々流転」に使われた墨は、明代の程君房製の青墨「鯨柱墨」であった。この墨を二つに割って半分を芋銭にあげ、芋銭はこの墨で「水魅戯」を描いた。



横山大観筆「神国日本」1942年（昭和17）足立美術館蔵
戦意高揚のシンボル、富士



横山大観筆「正気放光」1942年 富士と山桜

夏目漱石は寺田寅彦を伴って第六回文展の会場を訪れ、批評文を東京朝日新聞に「文展と芸術」と題して十二回にわたり連載した。

その中で、大観の「瀟湘八景」に関して「此八景はどうしても明治の画家横山大観に特有な八景である・・・一言でいふと、君の絵には気の利いた様な間の抜けた様な趣きがあつて、大変に巧みな手際を見せると同時に、変に無粋な無頓着な所も具へてゐる。君の絵に見る脱俗の気は高士禅僧のそれと違つて、もつと平民的に呑気なものである・・・」と、褒めている。

漱石の芸術観、人生観である「守拙」「自己放下」など・・・



横山大観筆「瀟湘八景・漁村返照」
1912年（大正元）絹本着色

113.6×60.6cm 東京国立博物館蔵

1912年10月13日から11月17日まで上野の博物館で開催された第六回文部省美術展覧会（文展）に出品された。

「・・・即自己より技法を造るべき時代に候、此点よりして大観を日本画会の新人と申候は無理からぬ評言と存候、さりとして大観を深遠なる内面的描写家の如く誉めたて候は野生は呑込めかね候、野生は内面的には浅き軽き意味なる事を見居候」（大正元年10月24日付柳涯宛書簡に見える芋銭の第六回文展評）



川村柳月主宰の俳句雑誌『ちまき』昭和初めに創刊。
題字は野口雨情。表紙絵などを小川芋銭が描いた。

「……私の宅に犬田氏より求めた芋銭先生の色紙と、長井雲坪先生ながい うんぺいの蘭の茶掛とが掛けてある。雲坪先生の絵を芋銭先生はほめて居られたとのことであつた。……私は、芋銭先生の色紙と、雲坪先生の茶掛とを宅に何年か掛けたままである。雲坪と云ふ人とは、逢つたことはないが、一生を乞食雲坪と言はれ乍ら、多くの乞食を「お客さん」として座敷に臥させ、自分は隅で絵を描いてこれを養つた人格と、芋銭先生が今の画家達とは違ひ、静かに河童を描いたり、田園を描いたりして、無欲なそして澄んだ心境を持つてゐることは実に尊敬すべきであると思ふ。この人格の高潔な二名人の絵をかけて居ると、その人の傍に毎日親しんで居る気がして、外に絵はいらぬと思つてゐる。」(1937年・昭和12年、『ちまき』6月号掲載の野口雨情「小川芋銭先生と私」から)



山村暮鳥詩碑 昭和2年建碑
茨城県大洗海岸の松林にある。
芋銭の筆で暮鳥の詩集『雲』
の中の「ある時」が刻されて
いる。詩を選んだのは萩原朔
太郎。除幕式には高村光太郎
らが参加した。

「ある時」
雲もまた自分のやうだ
自分のやうに
すつかり途方にくれてゐるのだ
あまりにあまりにひろすぎる
涯のない蒼空なので
おう老子よ
こんなときだ
にこにことして
ひよつこりとでできませんか

「おなじく」
おうい雲よ
ゆうゆうと
馬鹿にのんきさうぢやないか
どこまでゆくんだ
ずつと磐城平いわき へいの方までゆくんか



『山村暮鳥詩集・雲』装丁・挿絵は小川芋銭
暮鳥の死後の1925年(大正14)1月、東京の
イデア書院から出版された。



『土の精神・山村暮鳥詩集』装丁・挿絵は小川芋銭
1929年(昭和4)2月、東京の素人社書屋から
出版された。

「……いつかお目にかゝりたいと思つてからすでに久しいのである、……自分は恋人に逢ひにでも行くやうな気分
で沐浴し、喫餐し、折柄の糠雨を宿で借りた傘で避けながら闇の夜道をいそいだ。……芋銭氏はたゞの漫画家
ではない。……自然と人生の交渉に禅的ユニテイの味識を説き、ゴツホ、ゴウガンさてはキユビズムの名をみとめて
而も文晁、宗達の存在をわすれざるところ、創作は生活であるといふに於ても氏は自分等の遙かに及ばぬ直接をも
つてゐる。……その風貌を一見した時、自分はすぐにゴツホを聯想したのである。氏は日本のゴツホである。……
土だらけのゴツホである。……自然といふ言葉がいくたびか氏の唇からしめやかに洩れた。然しその自然は人間あ
つての自然の自然ではないやうであつた。自分の原始へ還るべき説にも氏は首肯してくれた。氏の自然と自分の原
始とは似たやうであつて、それでゐて決しておなじ内容をもたぬ非常に差異のあるものかも知れぬ。自然あつての
人間ではない。人間あつての自然である、……現在の間口ばかりの画家の中に氏のやうな真摯な芸術家のあること
を自分はよろこぶのである。……自分は氏を単なる芸術家とみない。芸術の生活者としてうらやみ、且つ尊敬す
る。……」(山村暮鳥「小川芋銭」から)



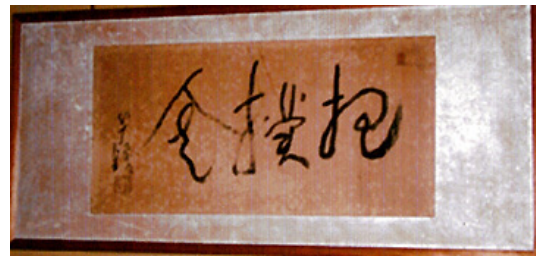
「河童の碑」1951年（昭和26）友人らが建立
牛久沼畔城中町、雲魚亭の近くにある。

碑陽には、芋銭筆の河童の絵と、芋銭が
つくった漢詩「誰識古人画龍心」が、
彫られている。

碑陰に彫られた自筆略歴には「彰枝堂で
洋画、抱朴斎に漢画を、その後中国の画
家費漢源に傾倒し、鳥羽僧正の筆意に傾
倒し、南画と漫画を描くようになった。」
と、記されている。

※費漢源は清国の画家で、1734年から
1756年の間に数回来日し、南宗画様式の
画技を伝えた。

「昔の人がどうして龍を描いたか。龍と
いうのはこの世にはいない。しかし自然
界の不思議さ、なぜ宇宙があって、太陽
系に地球があって、その地球にはいろい
ろの生物がいるのか、どこからどのよう
に生物が生まれたのか、考えれば考える
ほど不思議だ。」（「誰識古人画龍心」の住
井すゑの解釈）



芋銭筆「抱樸舎」扁額 1917年（大正6）

芋銭が犬田 卯（住井すゑの夫）に贈ったもの。

住井すゑは、1935年（昭和10）に牛久沼の辺
に犬田卯と共に移住し、自宅敷地内に学習塾を開
き「抱樸舎」（住井すゑ記念館）と命名した。

「抱樸」とは『老子』第19章に由来する言葉で、
素朴な心を抱きつづける意。「樸」とは山から切
り出されたまんまの原木のこと。原木は多種多様
な可能性を秘めている。



「抱樸舎」（住井すゑ記念館）

「雲魚亭」（小川芋銭記念館）の数軒先にある。
標識はあるが、現在は閉館のようだ。住井すゑも
犬田卯も忘れられようとしている。

資料4 抱樸舎と芋銭

芋銭先生景慕の詩 高村光太郎
悩まざるものあらんや。
窮迫せざるものあらんや。
若くして一つの道に憑かれた魂の
正しきに順ふもの、
みな殆ど餓えんとす。
文明開化の都會にもまれて瘦せて
弱く、
土なつかしい芋をわづかに喰らつて
一枚十銭の小間繪をかいだ。
それが先生。
芋銭先生は犬の多い都會をすてた。
東籬の菊はさもあらばあれ、
草深い牛久の里に鋤をもち
農家の婦に半生を支へられ
「恍惚として自然を見」
手に麻三斤のさとりを得た。
何がおのれの生活であり
何がおのれの性来であるか。
それは河童が教へてくれた。

芋銭先生は歴遊する。
先生をめぐつて天地の密意はあつまる。
霞む水には蜃氣樓。
岩うつ波には大龍巻。
さうして畦をとぼとぼ歸る
村の老農童子おかみさん、
あたたかくやさしくきよく、
物に向つて物思ふ輩のあはれ深く、
しんじつに見る、
しんじつにゑがく、
是れ一か是れ二か。
先生は大觀にもらつた青墨をよろこび
しづかにかくそそれを磨る。
膠の枯れた雲煙が乾坤に立ちこめる。
芋銭先生が龍に乗るのは
右軍過庭と遊ぶ時だ。
窺ひがたい臂力（りよりよく）であり
又放たれた造型である。
しんしんとして律令あり、
しかも一切を脱却して非情に入る。
無何有（むかう）の郷無からざらんや、
先生六極（りつきよく）の外に風を撃ぐ。

水草しげる牛久の里に河童すみ、
もとより河童は出沒時なく
喜怒哀楽に際涯なく、
背中の甲羅で世情をうけとめ
頭のお皿に命の水をたつぷり湛へ
酒買ひにゆき
村の娘にからかはれ、
或は鎌（やじり）のやうにするどく
或は愚かのやうにのどかである。
芋銭先生が河童にもらつた尻子玉は
世にもおいしい里芋となり、
里芋光を放つて變貌すれば
まことに觀世音菩薩におはす。
先生菩薩なるか河童なるか。
そもそも芋をくらひて幽玄の味に徹
する
是れ野人なるか真人なるか。
願はくは大休老師の一轉語を得て
わたくしも亦眼をひらかう。
春の雨草をぬらし
牛久の草汁庵に先生亡し。
景慕は酸のやうに心にしみ
言葉はただ遠く先生を迂回する。
1939年（昭和14年）3月12日作